

# 幻想細胞

日野 笙子

記憶は物置きに入れられたところからはじまり  
その小屋に野良犬と眠ったところで中断した

彼らが休息する間もなく

小屋は薪となって燃やされてしまったから

野良犬は少年のもとを去っていた

このときはじめて彼は温もりらしきものを知ったのだ

それから少年は凍結した沈黙の世界を

最後まで彷徨うことになる

あれは長い悪夢だったのか

テロリストに殴打されたみたいな怖さ

物言わぬ犬の遺体が夜ごとささやく

冷酷さと恥辱は心の闇からも消せなかった

ある日少年は放下するように

ふんぎりをつけ家を出たのだ

いつの頃からか風変わりな男になっていた

長いこと無為と独りに慣れっこで

食事をするのも洗濯機を回すのも外をうろつくのも

ばかばかしいほど自由だった

男はもう人生の

何に焦がれていたのか忘れてしまっている

たとえ男が日だまりの光景にいたとしても

道端に吠える子犬も

登下校のバスを待つ母子も

男の気を惹くものはもはや何もない

ただひとつのリアルを除いては

男の毎日は妙に規則正しい

吸い込まれるような地下鉄の

楕円形の入り口から出ると

いつのまにか雪降る舗道だ

ひんやりとした夜空に

無為とオンラインが流れる

電子シャワーのような一室で

日ねもすアクセスをしある細胞を増殖させている

男はついに叫び声をあげた

空想も妄想も入り込む余地のない

真にシビアな過去の重力に

夜が解体し ついに

誰の子でもない幸福な子どもが

男の軀から

生まれ落ちたのだ